

たので、正確な日時と地名を申し上げることが出来ず残念に思います。

ソ満国境からサラワテイ島警備へ

福岡県 大坪 正 保

私は大正十一（一九二二）年九月九日生れの八十五歳、物忘れの老境に入り大方の記憶が定かではなく、大切にしてきた軍隊手帳も数年前に焼失してしまいました。思い出すままをお話しますので事実と異なる思い違いも多いと思います。

私は農業・大坪米造の六人兄弟の長男として出生、母ハツが早逝し、応召時は義母を迎えていました。家族は五歳違いの次男保広、長女チトセ、次女シゲ子、三女ミチ子（養母の連れ子）、三男行信（応召中出生）でした。

家は農家で田八反を耕作していましたが、徳益では大きな農家でした。ほとんどが小作で自作田が二、三反もあれば、ぐべん者（裕福者）と言われました。戦後農地解放で全部自作になりました。農地を他人に預けて戦争に行った者が帰って来て

も返してもらえませんでした。部落は柳川のそばで、後に西鉄電車が大牟田まで開通したので、久留米、大牟田の会社での軍需増産の求人が急増して、農業以外の職業も多かったようにも思います。

昭和四年（一九二九）四月豊原尋常小学校に入学、学校は徳益から一キロ足らずで、柳川の城から一里の所で、校門に一里標石が今も立っています。十年三月に卒業、四月大和高等小学校に入学十二年卒業、後十四年まで大和青年学校に就学しました。毎日ではないが教科は戦時色が濃く、軍事訓練、銃剣術等で在郷の予備、後備の気合の入った人達が指導員で来て鍛えられました。上海事変、満州事変、支那事変と戦域が拡大していた時代でした。

そのころ、小学校は全部着物でした。下駄と藁草履で、女の子は湯文字、男はスツパツパ、高等科になるとパンツの時代です。雨風の時は雨傘は吹き飛ぶのでござを巻いてテツペンをなわでくくって、頭からかぶって裸足で通学しました。夏も

冬も下駄に草履と裸足は変わりませんでした。私は朝早く行つて廊下の水拭き等の掃除をしては褒められました。

家には馬がいて、馬が大好きな私は小さいころから馬の草も刈り可愛がつて、肥えて大きくなったら、博労が来て、親父とタオルをお互いのの上に乗せて、指先で交渉、値段を決めて金を取って行く（育てたのだからもうのだからと人は言うが）そして小さい当年馬を置いて行く、親父に文句を言ったものです。

馬が足を折ったらこれは駄目、治らない、すぐ屠殺場に連絡して生きているうちに処理します。専門家が来て大金槌で額を叩いて殺し連れて行きます。死んでからは処理費はこちら負担になります。本当にかわいそうでした。

当時農耕はすべて人と牛馬だけで機械はありませんでした。学校卒業後は馬使いも私の仕事でした。鋤の深浅の調整も私の得意技です。父は長男の私に何もかも任せ切ったようでした。少年時に

心身共に鍛え抜いたことが、後々の私に大変なプラスになって返って来ました。

応召、入隊、軽機関銃手、満州、ニューギニアの戦場で頑健、忍耐、困窮に耐え得たのは昭和初期の不景気の農業を体で乗り切って来た賜物かと、困窮時代に感謝する思いです。

徴兵検査は昭和十七年一月十日、柳川の西方寺で受けました。耳が遠いからと第一乙種でしたが、人が足りなかったのか一カ月ほどで甲種に変更したと訂正の手紙が来ました。

入営は昭和十八年一月十日、お宮様で武運長久の神事、区長さんの激励にこたえて決意表明し、留守を頼んで、部落総出で徳益駅まで歓呼の声と旗の波で送ってもらいました。花畑で下車、徒歩で久留米歩兵第四十八連隊まで付いて来てくれた親戚に私物を渡して入隊しました。

第三中隊第三班、軽機関銃分隊に配属されました。昼食は鯛の尾頭付きで御飯があり、軍隊とは大した良い所だと思いました。ところが翌日から

ジワジワと訓練が始まりました。高良台演習場で、最初はシャツ一枚パンツ一枚で、五体軽々と演習、体操、次いで一週間で雑囊、一月で背囊、一週間分の携帯口糧と次第に重い物を持たされた演習になりました。

軽機関銃は四人ですが、移動には一人で担ぎます。大牟田で名を売った遊び人とか、威張っていたのが演習で担がされて、どうにもならないのを『おいこっちにやれ』と担いでやりましたが、今でも手紙で、「その時分はお前に助けられた」と言われています。初めは軽くても歩いて行くうちにだんだん肩に食い込んで来て、担ぎ方が悪いと班長にピシヤッと気合を入られます。

私は百姓で毎日担ぐのが仕事で、俵も天秤棒もお手の物で、二十一、二歳の若い盛り、体は頑健、気力充実、子供の時から夏も冬も、砂利道の雨や雪の中を裸足で歩き、自然の中で鍛えていました。

初年兵は五十人ぐらい一緒に入隊しました。高良台演習場での教育も三カ月で一期の検閲、一選

抜での一等兵に十人が進級、私は七番目でした。

昭和十八年四、五月ころ、門司から釜山、図們、満州国の牡丹江、東寧、城子溝の第三〇六部隊に到着して、ソ満国境警備に任じました。在満一年、上等兵に進級しました。熱暑も、酷寒マイナス三〇〜四〇度も若さと気迫で何のそのでした。

昭和十九年の二月半ばごろ、夜、突然「口号演習」という名目の非常呼集で起こされました。私物も全部持って、新しい物と着替えて、完全軍装で演習はどこであるかと言っている内に、駅まで行軍、車上の人となつて、新京（長春）、奉天（瀋陽）、釜山へ下関では全国からの混成部隊を作り、輸送船団を組んで南方戦線へ向うものと分かりました。

下関を出て台湾への途中で、バシー海峡ではアメリカの潜水艦に魚雷攻撃でやられる、との情報が入りました。船団は無事に高雄に入港致しました。

昭和十九年は制海権も制空権もアメリカに握ら

れていますので、いかんともなし難いでした。駆逐艦や巡洋艦は船底が浅いが輸送船は底が深い。

二階も三階もあるので魚雷を避けられないとの話でした。高雄には二日停泊、いよいよ大船団の出航で、護衛艦が周囲を警戒しながらの航海ですが、後で聞くと、敵は日本の護衛艦と輸送船の間で潜行しており、性能が良く日本の潜水艦の何倍も深く潜れるので護衛艦が敵潜水艦を補足出来なかつたといえます。夜の太平洋のあなたは、こなたで、魚雷攻撃で船団から火炎が上がる。積んだ火薬に当れば轟沈、どれだけ艦船と人員が沈んだやら、一緒に船出して、暗然たる思いです。

幸い私達の船は朝方攻撃を受けましたが不発弾で戦車、自動車を積んだ船倉がやられて大穴が空き、船が傾いて航行不能となり目のフィリピンの島に泳ぎ付きました。ミンダナオ島か、次いでニューギニアには駆逐艦で送られました。西ニューギニアのサラワイ島でした。ここの飛行場の警備が任務でした。

着いて一週間ほどしたら飛行機が空いっぱいになってきましたので日本もこんなにあればと大喜びでタオルを振りますとそれは敵機で、バラバラと機銃掃射を受けましたので椰子の木の陰に飛び込みました。飛行場は爆弾で穴だらけで、我々は毎日一輪車で土運びをして、ようやく修理を済ませますと翌日また爆弾を落とす。また一輪車で一週間ぐらいで修理をすると直ぐまた敵機が来る。日本の仕事は一輪車で十日も掛ってやっと穴を埋めると、翌日はもう爆撃に來ます。スパイがいるのだと思いました。

島に着いた時は身一つで、携行した物は何もありませんでした。船が傾いて食料は駄目でした。到着すると先ず食べることでしたが南洋は暖かく、何でもありました。椰子、バナナ、野草に不自由はなく飢えることはありませんでした。まだ幼稚園ぐらいの原住民の子供が、日本人が登れない椰子の木に易々と登ります。『お父さんが熱が出ている、治してくれ』と言うので、クレオソートを

二粒ぐらいやると、電信柱よりまだ高い椰子の木に、するすると登って椰子の実を落としてくれました。

この島には空襲はありましたが、敵の上陸はありませんでした。一日十何回も来る双胴のロッキードは前から撃つて来て、後ろにも銃座があるのか通り過ぎて後ろ向きで撃つので、パツと椰子の木を回って避けることも覚えました。

炊事でも決して煙を出してはいけないので、炊事は夜中にしました。煙は飛行機に位置を知らせることになる。毎日三時ごろ、スクールがやってくる。体と衣類の洗濯で、真っ黒い雲が来ると大粒の叩き付けるような雨が降る。関東軍の精銳機関銃分隊も島では一度も射撃なしでした。

畑も完成、木を切って家に形を作り、芭蕉葉等で屋根を葺く。サソリを避けて高床にする。椰子にバナナに畑の野菜、海には魚がいっぱい住民とも仲良く暮らしました。便所は海で用を足します。済んだらジャボジャボ水洗便所ですよ。小魚

が糞を食べに来るのでいくらでも取れます。敵機が来るとさつと山に逃げるのが毎日でした。原住民は男も女もスッポンポンでした。

サンリは海老に似ており、毒蛇も沢山いました。いる物は何でも食べました。体長二メートルの鰐の取り方も現地人が教えてくれました。罨に掛った鰐の脇腹を鉄砲で撃って、料理する身は美しくうまかった。海から上がって来る時は前足の足跡を後ろ足で消して行くので、通路が分かりませんが、卵を産んで帰る時は後を消さずに帰るので入る道が分かりません。

現地人を可愛がっていましたから仲良しになりましたし、何でもやってくれました。クレオソートは現地人には万能薬で何にでも良く効きました。お札に鶏とか、豚等ももらいました。原住民は右手で用便尻を洗うので、右手は汚いと言う気持ちがあるのでしょうか、右手で物を上げてでも決して受け取りません。左手で上げると喜んでもらいます。それぞれの土地の文化歴史を理解して付き

合うことが大事です。

終戦はしばらく分かりませんでした。毎日毎日の空襲がピタッと止んで二カ月して軍本部の放送で終戦が分かりましたがまだ負けたとは思いませんでした。日本には神様がおられる、負けるはずはないと思っていました。やがて、アメリカ兵が上陸して来ましたがとても友好的で、「捕虜」を大事にしてくれました。ロシアは「捕虜」を虐待したと聞きましたが。「捕虜」の仕事は掃除と草むしり程度でしたが少しも無理なことはさしていません。それで今でもアメリカさんには感謝しています。

私たちは満州では実弾射撃はしましたが、島では一度も武器使用はなしで、戦地に行つて百姓と隠れんぼをしに行つたと変わらないと思います。南方は暖かかったから良かったものの、原住民の言葉がやつと分かるようになって終戦でした。島では駐屯していた部隊は混成部隊で、一緒に郷土から来た人はいませんでした。

初め私は制空権や制海権がアメリカに取られていたことも知りませんでした。私達の島では犠牲者が出ていません。戦死なしで、全員無事帰還しています。またアメリカの捕虜になって良かったと思います。ロシアの「捕虜」の扱いを聞いて身に沁みます。アメリカ兵は親切で、一度でも食事をしないと必ず訪ねて来て御飯を食べさせました。

サラワティ島には二年三カ月ほどいました。帰還はアメリカの船でした、快速の船で十日航海しても島影が見えず、太平洋の広さを知りました。この船で夜トイレに行ったら私とそっくりの船員と会いました、余りの不思議さにはばくして引き返して見に行ったら、向こうもやっぱり引き返して来てトイレの前でパツタリと、言葉は分からないが握手をして別れましたが人種が違っても似た者はいるものだと思います。

名古屋に上陸、帰りの車中で柳川弁で「帰ったら腹いっぱいまかもんば(うまい物)たぶごたる

(食べたい)」といい、その後も柳川藩の者達は一緒に集まり、話し合い、以来行き来を続けてきましたが、今は集まる人も少なく、訪ね会う機会も無いです。

復員は昭和二十一年五月二十七日ですが、義弟(義母の長男)が死んでいました。帰還して通夜、葬式を済ませて休む間もなく、お百姓に就職です。農地解放で小作田が耕作者の所有になりました。続いて農地の交換分合、耕作用の電気工事、灌漑用の井戸掘、水路の設置等大変な事業が県、市町村の指導で進められました。これらの事業の推進に努力しました。

結婚は昭和二十二年で、相手は西鉄電車の塩塚駅そばの実母の里から来ています。復員して来た時、お前の嫁はもう決めとる。それで良からうと、母が早死にしたので、母の里からもらったぞと言われ、それで決めました。子供のころから顔は知っていたので良いと答えました。私が二十六歳、家内は十七歳で嫁に來ました。翌二十三年女の子

が生まれました。

大和干拓Ⅰ 入植（応募資格五十歳未満）

昭和四十五年大和干拓が完成しました。大和町から入植希望者の募集があり、大和で十二人余りの応募者がありました。各町村の合計は、県全体で百二十九人中二十五人が入植しました。場所はそれぞれくじで決められました。

干拓では、種々の役も勤めました。農事組合長は農業関係一切をつかさどります、行政関係では区長を任期二年を五年勤めました。これらの役職を務め終え、静かに振り返って見ますと今まで生きて来たことが不思議に思えます。三年六カ月の軍隊生活、加算を入れて十一年七カ月。軍恩なしで、一時恩給で一万二千元を頂きました。ところが近ごろでは、軍人恩給をもらっていたら死んでいるだろうと思えば、もらわなかったのは有り難いことでした。

私は六十歳になり、農業者年金をもらうようになって、その一年分で皇居清掃奉仕団に応募しま

した。一週間皇居の中を回って清掃、草取りをしました。一週間の清掃団の仕事が済みますと、昭和天皇皇后両陛下から本当に手の届くような近くでお言葉を賜りました。『皆さん御苦勞を掛けました』と挨拶されました。

長年苦勞を掛けた女房も健在で、毎日お里の苺の栽培の手伝いに行くのを私が送り迎えます。生れて八十四年間、戦前、戦中、そして戦後常に全力でことに当って参りました。

戦争のことを考えれば神風を信じて、全国民が大変な苦勞をしました。勝つても負けても戦争などではいけないことと、つくづく思います。大変な犠牲が出ます。

六十年の平和の上に、日本の今の繁栄があることを有り難いと考えます。